

死と生のあわい

2025年10月11日(土) 14:40-17:50 司会 秋本倫子 東洋英和女学院大学准教授

日本人は古来から、死者と共に生きてきた、あるいは死者の存在を身近に感じながら生きてきたと考えられます。死者との交流はたとえば伝統的な芸能である能にも、東日本大震災後に話題になった霊的現象の語りにも、また、若い人向けの物語や映画作品などにも見られます。

今回のシンポジウムでは、宗教学、心理学、倫理学、等の広い分野に深い関心を寄せながら死と生、スピリチュアリティをご研究されている、東京大学大学院人文社会系研究科の堀江宗正教授と、長年にわたり心理臨床の実践に取り組みながら文学や芸術の深層心理を分析もされている、京都先端技術大学の山愛美特任教授にご講演頂きます。コメンテーターとしては、古代メソポタミア文学『ギルガメシュ叙事詩』研究の第一人者であり、当死生学研究所の元所長でもあった渡辺和子本学名誉教授と、心理臨床の実践家で且つナラティブ研究者でもある森岡正芳立命館大学応用人間科学研究科客員教授をお迎えします。本シンポジウムでは、これらの先生方の相互作用によって、きっと、「死と生のあわい」に関する新たな物語や気づきが生まれることでしょう。ご参加をお待ちしております。

発題1 堀江 宗正

ほりえ のりちか

東京大学大学院人文社会系研究科教授

■プロフィール

東京大学大学院人文社会系研究科教授、死生学・応用倫理センター所属。同大学院にて博士(文学)取得。聖心女子大学で専任講師、准教授を経て、現職。専門は、死生学、スピリチュアリティ研究、田中正造研究、宗教心理学など。

■主要業績

著書に『歴史のなかの宗教心理学——その思想形成と布置』(岩波書店, 2009)、『ポップ・スピリチュアリティ——メディア化された宗教性』(岩波書店, 2019)。共著に『死者のか・津波被災地「霊的体験」の死生学』(岩波書店, 2021)などがある。

発題2 山 愛美

やま めぐみ

京都先端科学大学人文学部特任教授

■プロフィール

京都大学教育学研究科博士課程学修認定退学、博士(教育学)。臨床心理士。京都先端科学大学人文学部心理学科特任教授、専門：深層心理学、臨床心理学。語り、物語、芸術、夢、臨床実践を通して心の深層を探ると同時に、これらの表現様式の国際的な比較文化研究を通して日本の文化、精神性、死生観について考えている。

■主要業績

著書に『言葉の深みへ』(誠信書房, 2003年)、『村上春樹、方法としての小説』(新曜社, 2019年)、『心理療法家がよみとく「君の名は。」』(新曜社, 2022年)、英文論文にThe Meaning of Mystical Experiences on the Boundary between Life and Death, *Jung Journal, Culture & Psyche*, 13, 21-34他多数。

物語死生学の可能性 ——死者が私のなかで生きている ということ

内容紹介：

本発表では、物語が死者と生者をつなぐ媒体としてどのように作用するかを考察する。ポスト・ユング派のHillmanは「神々が私たちの中で生きている」と述べたが、Hollisは「幽霊が生を駆動している」と表現した。発表者はRicoeurの物語理論を援用し、「神々＝幽霊＝死者＝物語が私のなかで生きている」という図式を導く。さらにJohnsonの示した老年期における「biographical pain」が、この図式によって包摂される可能性を示す。具体例として、『夢十夜』、『火の鳥』、戦争の世代間トラウマを取り上げる。

生と死のあわいで ——私の「死生観」を立ち上げる

内容紹介：

生と死の間(あわい)に立ち顕れるさまざまな現象とその意味について、文学作品や民俗学からの知見(『遠野物語』やブルターニュの伝承)、ユング自身の体験、震災後に遺された人々の証言、さらに心理臨床での経験を通して考えてみたいと思います。かつてのように、共同体が共有していた『死生観』が失われつつある現代においては、私たち一人ひとりが、自らの「生」と「死」をめぐる物語を探り、独自の死生観を立ち上げていく必要があるのではないのでしょうか。

コメンテーター

渡辺和子(東洋英和女学院大学名誉教授)

森岡正芳(立命館大学大学院

人間科学研究科客員教授)

- ☐ シンポジウムはオンライン開催
- ☐ お申込み
 - 死生学研究所HPから
- ☐ 参加費：無料
- ☐ お申し込み締め切り
 - 10月8日(水)17時

